





明治十二年見録

二月部目録

印あつた排僧の
季と持りのえ

○養生の法の雨風の考の計
○妙茶との外人家直室の計
外々よ粉多ありゆへ
月録ふりしるごと

二月

陰陽生 調子
異名

驚整節。七十二候
占候

春分中。七十二候
天候占候

月日令。二月日の定しるごとと愛ふあつむ

中和節。下酒
献生子

上春服。吉野餅配

都二月堂行。秋奠

初午。櫛荷祭。水間祭

東福寺懺法。耶泰

初午諸祭。南都春日祭

江本妙寺詣。大原の祭

二月目録

△八幡初卯	ハ	△園韓神祭	上
踏青節	ハ	迎富	ハ
賜尺	ハ	蚕農市	ハ
萬神都會	ハ	△出代	ハ
△行基参	ハ	△二日灸	ハ
△初年祭	ハ	△新能	ハ
△若宮能	ハ		
祇園八講	ハ	△遺教經會	ハ
泉涌寺舍利開能	ハ	△貴船五穀祭	ハ
列見	ハ	百花朝	ハ
△二月堂水取	ハ	△花朝節	ハ
△涅槃會	ハ	△二月の別	ハ
△佛の別	ハ	△さざり佛	ハ
△暖峯柱炬	ハ	△天壽常樂會	ハ
△真福寺常樂會	ハ	△彦山祭	ハ

日八廿 日五廿 日二廿 日七 日九下

△餅花奠	ハ	△積塔	ハ
△貝寄	ハ	△觀音設辰	ハ
△浅間祭	ハ	△普賢菩薩	ハ
△天壽聖靈會	ハ	△比良八講	ハ
△天神御忌日	ハ	△某種御供	ハ
△天和の節	ハ	△道明寺祭	ハ
二月令	此部小日の定きるる二月 一ヶ月のあつたあつたす		
△彼岸	ハ	△彼岸迎僧状	ハ
△天王寺参	ハ	△天王寺踊念佛	ハ
△時宗踊念佛	ハ	△社日	ハ
△男女嫁娶	ハ	△紙鷲	ハ
△得子	ハ	△初雷	ハ
△鵜鳥の圖	ハ	△候霜	ハ
△水口祭	ハ	△田畑野山焼	ハ
	ハ	△季御讀經	ハ

三草木

此部は二月三月の本の類とす

△苗代

△同葉更 三下 △種浸 △種赤 三下

湯種

△垂じ 三下 △種蒔 △種まじ 三下

△藍麻

△まき 三下 △葎 三下

△蒲公

△公 三下 △杉菜 三下

△狗脊

△脊 三下 △枸杞 三下

△五加木

△木 三下 △虎杖 三下

△韭

△韭 三下 △蒜 △野蒜 三下

△水葱

△摘 三下 △薺花 三下

△菜の花

△花 三下 △大根の花 三下

△鬘草

△草 三下 △末黒薄 三下

△草芳

△芳 三下 △草れ若葉 三下

△秋の焼原

△原 三下 △芦角 △芦錐 三下

△角組

△芦の葉 三下 △サ又摘 三下

△若紫

△紫 三下 △接骨木花 三下

△銀杏花

△花 三下 △紅梅 三下

告紅梅

△盛文 三下 △八重梅 三下

△座論梅

△梅 三下 △越中梅 三下

△黄梅

△梅 三下 △初梅 △初花 三下

△待花

△花 三下 △糸櫻 三下

△姥梅

△梅 三下 △見梅 三下

△一重梅

△梅 三下 △彼岸梅 三下

△熊谷梅

△梅 三下

△種植

草木のたひまきとて種を植

△接穂

△穂 三下 △茄子栽枝 三下

西瓜

△瓜 三下 △木 三下

△おろし

△心 三下 △蓮を植 三下

修樹

△樹 三下 △葉種根取 三下

月生類

此部は二月三月の本の類とす

△果鳥

△鳥 三下 △雉子 三下

二月 目錄

△燕 同巢	△引鶴 引鶴	△孕雀 雀子	△孕鹿	△蜂 蜂の巢	△蝶	△蟾 蟾	△蛙子	△燕 燕	△蠶 蠶	△蟻 蟻	△蝮 蝮	△馬 馬
△歸雁	△鳥巢 吉業	△松毛鳥	△鹿角	△虫	△蛙	△青蛙	△鮎子取	△田螺	△寄居虫	△馬刀		
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三

二月 二月一ヶ月 要用の
 事とありあり
 二月 目錄終

二月之部

△此印ありハ能僧の
季とりのりの人

當月ハ清風脆月
 舒日ハ仲陽の氣
 松野外ハ出て
 去州ハ踏天
 氣と專小受
 行ハ夫陽の
 行ハ草木の
 入也日の影と受て

異名 △仲春 △陽中 △如月 △今月
 △夾鍾 △驚蟄 △春分

△小草生月 △梅見月 △雪消月
 △梅津月 △衣更着

異名註 △夾鍾ハ 律のそと
 夾ハ言甲也石の物也

雅曰二月乃如といつる蟄。蟄。春分のこけハ二丁目あり

蔵玉 小草生月 顯昭
 月竹乃なるむさうのころ

哥 梅は三月

友則

うらひそのかよひの星の宿の
花堂なる梅つさ月

哥 蔵玉 梅見月

有家

とく人みなに梅つさの梅見月
風のまことけを結ぶさうも

哥 莫情 雪消月

○と終てまよひえさすあまの根の
ゆきこえ月のはもよひは
俳花のさく木はそとに二月は
考

節 驚蟄。七十二候。草木芽二
候。昼夜長短日の出入等左記



○松花は花の松の花いらさきじまる
○倉庚は雀の松の花いらさきじまる
○のまなこことれども松の会庚ハ
軽鯨ツグニス又カラウグニスとのひて系
大坂の辺に本写くは松大さきこ
右のてくさうひそに松の尾
と那とま毛あうはウグニス
小松さう二月より松の松
陰類なり松ハ陽類ハ仲春の松
さうなるう松と松の松
も陽類の松と松の松
仲まの松といつらう礼祀出

節占候 雷あれかまの寒は
あまの中旬に雷あ
まの未成傷入下旬雷あれだ
轟ありをりしとら未成にわらハ
をまかろ辰己よかれハ
いしあり新のが早あり

○松花は花の松の花いらさきじまる
○倉庚は雀の松の花いらさきじまる
○のまなこことれども松の会庚ハ
軽鯨ツグニス又カラウグニスとのひて系
大坂の辺に本写くは松大さきこ
右のてくさうひそに松の尾
と那とま毛あうはウグニス
小松さう二月より松の松
陰類なり松ハ陽類ハ仲春の松
さうなるう松と松の松
も陽類の松と松の松
仲まの松といつらう礼祀出

中

春分。七十二候。草木主候。日の
出有長長。終季くたにまうす



去るの日はむりこまの社日に來
秋の社に歸る市中に來りて
人々に粟とじとひみとせじ
○雷声をなるとこハ穀果付云陰
陽相濟る感トて雷とかなる云
發りつを雷といひなみされを
電と云まハ陽に入るのそりり
を發あり秋ハ陰に入るれりり
ままハ發さる電ハ陰陽陽
の發をなれ地ハありて上天

發るるおののまかは日秋の
まひとく日ハ秋の寒暖と
みひと發をなれあけて日の出
るまて二分まを時と目入て考
まて二分まを時と目入て考
おせてま時はおま漏るといり
春分 日考妣先祖をなるとし
分祭 考妣死せる父母成り
先祖ハ祖父祖母と云こ上成
りハ父母先祖ハ祖父の根をこ
まて二分まを時と目入て考
まて二分まを時と目入て考
一年に一日おてお倍これと稱
月といハ毎月お目お倍にあら
ど春秋のまよりハ一年生れ
てはのこらハ早秋候目を倍
春 天氣占候 老人星は日の
分 天氣占候 夕の丁に照れ

妙術

明日いよいよ日出でさう
くは遠志の心を去り

てせんと二杯のとして又さう出
だせば疲さうをさうとさう

無病ゆゑ長壽をばらうり
實は是神仙の奇々妙法なり

吉野餘配

朔日花供
法の両行人

本堂へ出て御供奉幣
廣庭ふる餅をさうさう

南都

西京薬師寺造花會
朔日七日すし金堂中

いろいろの送り死と供し大法會
行々俗西京の死とさうり

三月堂行

南都へ水取
朔日より十四日まで

牛王加持の修法あり上七日尖像
観音下七日小観音の勤る僧は

修の僧とさうり
俳あえや修の傍のぬれさ芭蕉

大坂

天王寺六時堂修上會
有朔日より三日追曹刻

上丁 釋奠

孔子とさうり
二月八月兩度有

謚を大先至聖文宣王と申奉る
朝廷より毎年大學寮

孔子をさうりかへと法
ては孔子と教子とさうり大宰

府つては孔子と関子騫と依
あさひより延喜式よさうり文

武天皇大宝元年二月よりは
まりとなり後花園院寛正年

中々をさうり應仁の大乱より
絶り孔子は上一人より下萬民

至るまで天下萬世の師とる本
朝もさうりさうりさうり

に決才に詳かり○礼記王制
秋葉奠幣とありあり秋奠と和

言いおささうり

哥 年中行事

二位中お

かゝるのかしこらみとらりてあて
ひしそのおとらみまうらるる

俳 飯椀の備へる味を秋奠 嵐雪

秋奠鳥のる喃をせり 野坡

詩 上丁詞

陸放翁

燎火明中庭老樹泣殘雨

白頭奉祀事 忍羅劇仰俯

三終樂在懸 再拜肉外姐

誰言千載後 恍若到鄒魯

吾國雖編小 大社祚茅土

如何儼童綬 日夜苦蕪楚

藏書如丘山 及物無一羽

吾其可憐哉 去々老農圃

初 稻荷祭 諸國これと

山城伏見のいさるといへるハ元

明天皇和銅四年二月十五日

は山に祀りて古くは五穀を以て

考ふるに日午とて五穀の

非されば稲荷とも唱ふ山を

この峯と云本社第一の字を

虚第ニ素盞鳥尊第三大

市姫又田中社四大神併て五

座とて永亨十年三の峯より

今の地より遷せりは日ハ洛

中洛外に群衆す市人は

黍粟等の種をうるもあるひ

土人形さうろは深草の名
おされびなり古の杉と杉をてか
さし降りし又幾とも折るる

哥 夫木

知衣

いさし杉のあそ葉をばはく
かへるいさるさくら人のしらん

後拾遺

惠慶

いさし心このまきさうちたきさ
我れきこし我れもこころよ

頭仲

いさし心まじの枝とたづのるを
あまのくのかさすりさるま

延喜年月次屏風初年素の画貫之
いさし心と我こそをくはいさし心
さし杉のまかゝしらん

佛心かみ皆枝のまれふいこふま考
うにた初年及の小篠系全

狂初年いさし心れとをばさう
社を化さるをなとのふま貞梅

水間祭

和泉國水間觀音
行基の他聖武天

皇の勅願此日くはるるのハ
年此厄難と除く草薺とをくはる

佛きつひ火や水者道
の龜の先 ぼ生 京 眞如堂境
内にある

京東福寺懺法

惠日山と号懺
法ハ六時ハ六根

の罪と懺悔する修行は日名画
兆殿司の画の觀音の像世三幅と

かくるこ又十万の札として火除の
守と方すの紙又十万の字とか

いて寺内同聚巻よりいだし
佛念るの像懺悔よ京福寺越人

摩耶叅

棋州兔原郡畑原
木山上よあを佛

母摩耶山切利天上寺と云天
武天皇の御時法道仙人の創造

なうは日叅詣の人ハ福とねる又
馬の無難と祈る土産もの昆

布と賣是と摩耶昆布と云
山の純頂ハ純景と摸播又四国の

山海一目にのぞき見ゆるるる

俳 横腹のそ乃もほし 广耶系 都文

狂 系流の山の下からのぞるる

ばよまやの観るる

近江本妙寺詣 今ハ寺院跡 たり旧跡ハ

三上山の石ころりあり今も初

申 南都春日祭 仁明天皇 嘉祥三年

九月始て中臣秀基奏聞とへ

て清和天皇貞観十一年十一

月九日庚申の夜初て行る其

式は次第に奉し関白藤原家元

哥 播州オ三首 顯仲

表てん々へのらまてまま日山

松のさうえしいやまこりほく

あめの下たえごとを忍いごも

かすらのふれ神とまつも

詞 小車。おん。ま。初。有。三。五。

上 大原野祭 山城乙訓郡 京より巴里

許西の春日の社と日神と

仁壽元年二月后宮御所の

けし、勸請たてたるなり

大原野行幸まどもあじたり

哥 年中行夏 経賢僧都

さけつたやりにみまうと

こやうのそくよれのまも

伊勢物語

大原やどりの心もく

神代のももれひいづ

詞 系毛車。むろ。後。は不

俳 大原や本も女にう

京 △八幡初卯。神系あり

山井。多豊安倍う

上 園韓神祭 古大内裏の 宮内省有後

其のころり昔ハ二月十日

系議一人なる所に

後

後

後

後

後

後

後

左の修湯醜井通あり 本荒報云
非人曰これ其珠のぶか 都丈

不成 踏青節 二月民俗俗
日就日 踏青節 となつて

郊に出てお賞とらと踏青とも
云聞中二月ともつてけまにする

占候 二月雨 あれか登者
大よはし 雨氷の早か

迎富 携へてこりの法因の
と心樂て暮へるこれと迎富

賜尺 唐制是日近臣よ
牙の尺とたまふ

蠶農市 唐土蜀の國に
二月二日台と西

日かいかい人の道具と賣
さる其あたひ系貫にいとら

萬神都會 二日とつて日
夫婦のとも禁

出代 出替今日より来年二
月二日迄と奉公人の期

とす京大坂の三月五日
九月十日才年と期とす

行基泰 津の玉昆陽川と
於に有行基建立

ちり比し一目の鯉ありて縁記
あり忠度のうたひも月も宿り

正行基昆陽院の雜奉へ持津
正行基別當と共に檢校と知ると

云く延え二年將軍を成素捨文有
ふらうやいと 俳 赤小豆煮る巫

二日灸 二日の灸が 如泉
二日やいとまたとつてこのさ

祈年祭 中災なく四時
ならめんといひ行なふ

之昔へ神祇宿まて行なふ
四日

四日

年中行事

いのりて入社のとをなむ名が代を
こくせあすりの神やうくらん

京 六波羅密をたけ盛の志を
行入寺ハ鴨川東五條より

七 新能 南都興福寺南大門は
四座の内ニ在休暇

うらまをほくび十三日まで
に入りてつとび△△△△△

能地うたひの盛さるるが
余に若の能のあり通し 其角

狂春日のく若の能名うーあ
とくひの沖ちいでうらうや 貞柳

春日若宮能 九日ふ南都若
宮のまへへて能

勤じ十日も洞十百 八 今日白髪
より千三百進門能と數日とぬくべし

占風 東南の風ハ水
西北の風ハ旱也 祇園

八講 八講とは法花ハの巻の大
意と論じらる今ハ後ら

九 遺教經會 釈迦堂大報恩ち又八条大
ちうてゆるる十五日まで有
まこと△△△△△

泉涌寺舍利開帳 十五日
せんやうしーまやうかいちやう

十 成 京 北山鹿苑寺祭同
天神祭社人射あ

十一 列見 六位以下の儀
有とのと概びて式部

兵部之二都よりほれ出ると上
ゆる政官の先しよをて量

容儀とて入るるこ上りこ下
ひめ冠をかざりの花あり

列見や若石引伸と鳥帽
詞百あはるがは能あともきかざは

詞百あはるがは能あともきかざは

詞百あはるがは能あともきかざは

十日 百花朝 十日とかくいり

台候 十二日 天氣快晴

の實より 夜雨あり

大抵 二月 夜雨をさくら

南都二月堂永取局大續松

二月堂 羅素院云 天平勝宝

四年 泐門 実忠建まを 像に因伽

井有是と 俗に若狭の井と云い

井のあとと取て 修治あり

匪庶ぞとむ都の

南大は會 丁史 日 日 日

十五日 花朝節 百花生日とも云

占候 月と初農の日と晴

蝶會 唐に花朝をもつて蝶

と撲會をたか

替昆市 日かこの名あり

涅槃會 涅槃像二月

○は日初迎入滅の日とす

是八月の初やまありあり

破形湊に周の穆王五十二年

二月十八日佛涅槃すと記せり

周の二月今の十二月より

改ざり ○釈迦如来ハ大恩

教王と稱し一抱尸那城

竹の辺 婆羅林の中たり

① 我すは風し吹れを聖ま令毛臨
② 天すの案成すて 衣よ未

何になく面ふそろうにさことひさ
金ふ系并勉土退屋

太秦廣隆寺 今云ふふ
に無威并依

京 後書御院中事加松
の下衣にこそとほとむ市

西遠の書いほろ ④ 近江 比良
六海

白髪にほは桓武天皇十
又奉に始は目必をひそくあり

松の徳末とかくきんどう
能く後よ八傳の月印帶霞

⑤ 京 小社△天神市
天鷹年中小社社之建

供これと公業権の市供と日
右禪院に八講あり公奉根原

日二月廿又日天鷹大自在天

神のかそあうる後ひし市日
善の表ありてる御院天化

二年より右禪院あて八講
菅家の中事ありて是と行ふ

よく奉給又藤大の匡衡曰天
信自在天神あるひ天下に

樹樹一人と補導し天よ
月日ごとくそつ民と忍味し

純中文道の太能月月の執
元巖山住心院の信給心散信

都は聖堂に於て遠言と治
或時 人とあうてあつれ未と

云かにかいりの棚のなうふ
あるらんと併られをまは天神

感ありてふ未たそふの事奉を
水の巻川浪のを二巻と掛け

たまふとまんとれうう魔
中又傍給のやうろ成た

ていけふ己の家といつ

或曰是皆云あはれと信どべんす
惟疎ハねて業持と傳ふ所供拜水育

河内 通明寺 鳳城寺 道成寺
今日本自他の本像

開帳及志貴教士昨村於に土
作まこと入代く九傳任持こり

推古帝の物死聖徳太子の御禮
なり天神の市社あり天降元年

天神と云はれちちの
三百六十八日 天

和の節 姜陽の舞まかん
して天降りなり

月令 三月五日のことす 彼を

去秋二なあり七日のるこひ入
の日に佛氏号て中目とひ

又此区と云者信等後信信
て信に借すと彼等と云これと

吾おのひとれたとあなひとじ
きに比して比るとしと

哥 海ふら新波の浦の夕日
西ふさうるさうさうさ

哥 西くりまよひさうれを終て
南を望むと仏の身象と云よ一編

詞 楊。紅。暮。種。ま。た。入。日。光。る。

非 なたちれたらと守彼をが支考
さうさくひとえはさこのひ給日

狂 ころりなる十万位土あまよ
かのさうさうさうさうさうさ

○ 林通春野 越にいとく或傍
木の深ふ杉樹善薩の記を

記 して於牟天の御よ矣所
聖ありそこに樹あり二月に

花 ひくく七日七夜にして
なる秋八月七日実生し

梵 天帝 救世 菩薩 集りて七日
の間世るの吾人悪人の名を

記 寸生死 彼を 經本 彼を
友 日 直 取 七日 修 善 業

これ春秋七日の事とつること
どもけ事たりなりぬる砥平
石の録は彼岸の日本の風俗
ありし未だくい歳時記に出る

茶の子 織内の流俗あり七日
の間亡人の日と云ふ

野菜の食類と知音の人ふわろ
彼を舎の余ひきほりては

彼者逆僧 片方に付尺牘

我等亡母高彼岸中

先慈諱晨偶中彼岸

日以因之摘菜蔬供

會預設蔬齋伏乞王

靈ふに付逆而僧況

趾臨漱廬為修其冥

經馳聞致度以山路

福則存没均感賤价

凡市若方ぬら奉納
謹言 奉讀

尺牘 書替 上中下

手趾 上室殿 下飛錫 奉讀 銀鹿以報

彼岸 天王寺 参 彼岸七日の
月修持より

出て修りす男女老若と申
小婦人の衣敷とかがり我

よ競ひ出てまはさし
ふのたのぬる茶つよひし

彼岸をけ渡ぬる若む日と備山

内らひひんさ候もあやめて

同躰念佛 天王寺念仏堂
ふて修りあり

天孫の名をうとて廿八善光院

の画像をかいて修りす平地大

念仏寺より掛来る二西門を

極東の東門にあると昔より

其下にあつたり西海の入口と

疑ざるし弘法大師もは西門

よて日想観と修したすしい

まひがん仲日の邪をよはは

入目をあがまらんがたきし

開たるようころへんのをあゆ

京 伊影堂△時宗 踊念佛

み條格西にあり毎年

去秋二季の彼者 踊躍念佛

あり中世に東尼と擧げられた

庭と制す伊影堂を稱とす

ち号成社 吾光寺と云ひこ

そらに仏恩と謝して余念

なくれらうよはるころの念

法苑徑ふけみあり

一遍上人

とねいそ子ねらふかおんまの

法の及よはとをたたりしぞ

狂 世いこれてまはの為おとえて

々入心新堂 踊念佛 声可

社日 立春よりあつめの戌の日

と春社と云うじよは

土の神とあうく土の万物とやし

かひ五穀と生す春の農事の

よからんゆひの日秋の其及

徳と報ざる意なき燕の春社

日にあつ秋の社日よはる

俳 うへおをたすを教よ慈め斜水

社日 左傳曰共工氏子

好舟車のいころあ足の達をあ

好舟車のいころあ足の達をあ

好舟車のいころあ足の達をあ

好舟車のいころあ足の達をあ

好舟車のいころあ足の達をあ

好舟車のいころあ足の達をあ

好舟車のいころあ足の達をあ

好舟車のいころあ足の達をあ

好舟車のいころあ足の達をあ

方壇 壇と築きて土地の靈を

祀る豊饒といひ

陳王分肉 前漢陳平里中の

社の宰ころる肉と

陳王分肉 前漢陳平里中の

社の宰ころる肉と

陳王分肉 前漢陳平里中の

社の宰ころる肉と

陳王分肉 前漢陳平里中の

社の宰ころる肉と

分事甚ひと一父老曰善哉陳
孺子兮宰たるや陳平曰嗟乎我
と天下の宰たら一ればまよふ
肉れごと一云々

治龍酒 社日よのひ酒と云
石林詩活よ出さる

社日よ酒とのめば鬯と治と
こつかりたりたる故なり

詩 兵部李濟

社公今日没心情
為之治鬯酒一瓶

社美 唐吳越の俗必美
と以て祀るとつり

社翁雨 社翁いづる水と食す
故に社日雨を雨といふ

詩 社翁ノ雨五言詞

幾點社翁雨一番花信風
社日ノ雨ハ草木ノクニハ父母ノゴトニチカ
三年中一番ノ風ナリ

詩 社日七言詞

今朝社日停針線起向朱

櫻樹下行 社日云女皆ハリニゴトコ
ヤミヲ見トキハ能ク行時

男女嫁娶 周禮媒氏の注
陰陽交て以て昏

礼とますハ天の雌に順ふとつり
さればは月誓姻ふよろし

紙鳶 春の風ハトよりして上
のぼる後をさうてある

非 志乃板や庭をふり張き支考
秘系こや遠去抱きて孤者百接

狂 狂いのるり云あけてくれハ女凡の
ぬエいさうりりくせなる 本端

紙鳶 故事 箏ハ琴ニ漢李
營中ニヲ井ニテ命

鳶ヲツクリ線ヲ引風ニ乘シテ
ノボス後ニイカノ首ニ竹ヲ以

笛トス風コフクメハ聲ヲチヌソノ
声ヲヒクカゴト一

未央宮ノ遠征ノ鐘

漢高祖陳豨ヲ征スルトキ韓信
紙鷲ヲツクリテ遠近ヲカリニナリ

得子 二月乙酉の日午ノ時
夫婦小抱にをる必孕し

初雷 仲春に初
めて雷を

けいより虫動く由へ後虫出し
とる入雷のよ妻の博物筈より

古今集
天のふらふらとちかちかなるかきも
ふりふりさふらさふらものり

詞
ふらふらとちかちかなるかきも
ふりふりさふらさふらものり

俳
かきかきに鳴きとちかちか折や左近
雷や他のまのまのの心嵐雪

狂
おもしろいおもしろいおもしろい
ふらふらとちかちかなるかきも 遊山

詩 雷七言對句 詩楚

響滿山河傾地軸 擊枯株
光乘風雨入天都 急雨過

三國英雄空失勢 對雷光
一鄉孝子為傷心 聽春雷

山鳴喬木例 滂沱無所避
水激蟄龍飛 霹靂不堪看

雷電 人君之象 雷ハ二月ヨリ
百八十日ノ間

二地ヲイブル即萬物モマタ
地ヲイブル八月ヨリ後百八十

日ノ間地ニ入ル万物モニク地ニ入ルハ
害ヲ除キ出ハ利ヲ興ス人君象

九ノ間地ニ入ル万物モニク地ニ入ルハ
害ヲ除キ出ハ利ヲ興ス人君象

九ノ間地ニ入ル万物モニク地ニ入ルハ
害ヲ除キ出ハ利ヲ興ス人君象

九ノ間地ニ入ル万物モニク地ニ入ルハ
害ヲ除キ出ハ利ヲ興ス人君象

九ノ間地ニ入ル万物モニク地ニ入ルハ
害ヲ除キ出ハ利ヲ興ス人君象

雷櫃

陳ノ時蘇紹ト云人雷櫃重井九斤十九モノヲ

得タリ宋ノ時沈活震木ノ下ニテ雷襖ヲ得タリ芥ニ似テ

孔ナシ○時珍曰雷書雷神ノ佩ル所ノモノニテ其落ノコリタル

モノナリ云々

○本朝ニテモ雷ノヲ千タルアトテ

異物又ハ矢ノ根ヤウノモノヲヒロエリ一諸書ニニエタリ

雷除ノ守

越ノ白山鶴也

有其々ちと畫正持すとバ雷雞とのがるくたに果あり

哥後孝昭院御製

白山のねは本後よかく



候霜

霜の目より百八日

候のあつらふらざりて又秋尾にめてゆより来る日十八日めのあより

氷口祭

梅はちにあつたれは

代水と氷の口とあるくまら

日と後て苗のハ一と其水

の冷暖をこれよりて氷口とあ

はるハス十串に幣さ一は

さしてあはよさすなり

師光

田畑野山を焼

芝焼早を

ハ地と焼て移るあつて是を

火柴といふ和名やいふこと

哥 夫木 苗代茶黄

小山田の苗代々のこまここ

こつろのまよふまよふりくま

茶黄のまよふ秋をたたり苗代田

種なひひ 茶とうゆるに生うら之か彼かの
ちね種とあらひひを彼

種後なひひ 種と下す

詞 たの伏 △種と下す

哥 千首 為尹

種なひひ 種と下す

種井 種と下す

種井 種と下す

新選六帖 為家

湯種 湯種と下す

湯種 湯種と下す

種時 種と下す

種時 種と下す

夫木 國信

藍時 藍時と下す

藍時 藍時と下す

蕨 蕨と下す

高たか二に尺じゆち入いふふ入い其その根ね葉はをを

製法とれバ昔粉とまらぐ

用ゆるなり

新拾遺 くらみち

和家

哥 万葉

若くは垂あの上はさわらひの
もえあつまよふたうけつるま

哥 丑槐

ふ里のなほのこころびよとれて
かぞへまは入年もほろとたり

詞 かきまらび。こころびよとれて
のりまらび。小井山。かぞへまは入年

連 けつまれのちうとすまの 蕨が 細也
こころびよとれてまのねがうま 玄仍

俳 ぶらぶらびのやまや ちのちの 蓮三
こころびよとれてまのねがうま 玄仍

狂 ころあげこころびよとれて
まのちよとれてまのねがうま 玄仍

詩 蕨 蕨詞 杜子美

雨足空山少 蕨萌春深 直題

真蘆紫金莖 兩ハフレドモ山ニ未ダワラモ
モ、エイテ子母春フカク

紫金莖ハワラビノ名ニ 伯夷不食

周家粟未必先知此味清

昔白夷カ首陽山ニカクレテワラビ
喰ノメタルユエニ今コノ味ヲシラレニ
テハシラナニダテ
アラフホトリ

詩 蕨七字對句 詩礎

承露未開仙女掌 元無骨

擊天先出小兒拳 已作拳

口中藥 ワらびあやこころびよとれて

真蘆之藥 くらびの粉とあつ付る

蒲公 異 僕公嬰。蒲公丁。黄花

和名 ふぢま くらびの粉とあつ付る

哥 死すも人やいさめのはらみ
若くは世のまよふたうけつるま

⑤ 杉葉 杉葉のたけて葉を去りて
土厚の或ハ形土厚に似
て別よて名をとりて用ひ
大和青料白葉枝を似る
⑥ 藻鹽草

⑦ 狗脊 狗脊の根を去りて
大和青料白葉枝を似る
⑧ 狗脊 狗脊の根を去りて
大和青料白葉枝を似る

⑨ 狗脊 狗脊の根を去りて
大和青料白葉枝を似る
⑩ 狗脊 狗脊の根を去りて
大和青料白葉枝を似る

⑪ 狗脊 狗脊の根を去りて
大和青料白葉枝を似る
⑫ 狗脊 狗脊の根を去りて
大和青料白葉枝を似る

⑬ 狗脊 狗脊の根を去りて
大和青料白葉枝を似る
⑭ 狗脊 狗脊の根を去りて
大和青料白葉枝を似る

⑮ 狗脊 狗脊の根を去りて
大和青料白葉枝を似る
⑯ 狗脊 狗脊の根を去りて
大和青料白葉枝を似る

⑰ 狗脊 狗脊の根を去りて
大和青料白葉枝を似る
⑱ 狗脊 狗脊の根を去りて
大和青料白葉枝を似る

⑲ 狗脊 狗脊の根を去りて
大和青料白葉枝を似る
⑳ 狗脊 狗脊の根を去りて
大和青料白葉枝を似る

㉑ 狗脊 狗脊の根を去りて
大和青料白葉枝を似る
㉒ 狗脊 狗脊の根を去りて
大和青料白葉枝を似る

㉓ 狗脊 狗脊の根を去りて
大和青料白葉枝を似る
㉔ 狗脊 狗脊の根を去りて
大和青料白葉枝を似る

㉕ 狗脊 狗脊の根を去りて
大和青料白葉枝を似る
㉖ 狗脊 狗脊の根を去りて
大和青料白葉枝を似る

㉗ 狗脊 狗脊の根を去りて
大和青料白葉枝を似る
㉘ 狗脊 狗脊の根を去りて
大和青料白葉枝を似る

㉙ 狗脊 狗脊の根を去りて
大和青料白葉枝を似る
㉚ 狗脊 狗脊の根を去りて
大和青料白葉枝を似る

㉛ 狗脊 狗脊の根を去りて
大和青料白葉枝を似る
㉜ 狗脊 狗脊の根を去りて
大和青料白葉枝を似る

虎杖 あいらちのしや 淡路宮 日本紀反正天皇

井ノ水ヲ汲ミテ太子ヲ洗フ
時タチヒノ花オナテ井ノ中ニア

リ故ニ御名ヲ多遲比瑞
齒邪天皇ト申シ奉ル

狂内カハ扶ミテいほくといまくと
かたけてとるほの虎うな 桃綺

葦 ふら 異名 長生葦 翠髪
和名 古美良 出羽 美良 二出ス

中心莖と抽ミく白花とひらく死
生のもの山とらうらう入る

能致る香くは 葦のみれ後 陽水
耳のじり入るんと出す 生らるの

けと能ふ合せ耳入まてじりの
ハジミのこころとひもておさるべし

蒜 ひら 異名 美菜 卵蒜 和名
比流 ひら 蒜 ふいニホヒナリ

ハニクムノ心香 のゆる 野蒜 皆食之
臭ユエ名ツク

故事 日本紀景行天皇 倭御尊 皇孫ニテ御子日

本武尊東夷征伐シ玉ヒ山海ヲヘ
テ信濃ノ山ニ入既ニ山峯ニラヨシテ大

ニ飢ツカレタニヒシ故ニ山中ニ御食
ス山ノ神コレヲ見テ白鹿ト化シ玉

ノ前ニ立テリ王アヤシメテツノ
蒜ヲ鹿ニ彈カケンバ眼中ツテ

死ニケリコニ控テ忽道ヲウシ
ナヒ出取ヲシラス時ニ白狗来テ

王ヲ道ヒキテ出ル
コトヲ得タニフ

原 はら 原 はら 原 はら 原 はら

たまふれりふむすめこれに蒜らひて
われと共考ふるせんかみさくらんり
たまふれりふむすめこれに蒜らひて
るこころさすいひかすすくせとい入る

あや あや 雑踏之歌 齊の田横カ
門人歌ヲツ

薺花

異名 護生草 三線柳
こり入花白く小児は

草の莖とくにうまふに引張
ひけば三味線の音にうたはれぬのじ

家集

好忠

庭の面うかづるの花のあなへと
こぼれしほぬちをこそおり入

狂ひくさく三味せん若人の恋こころ
なへなとこそいけはぬらぬ鯛

菜花 菜のうへはかふら又菜
たねを種し連二

大根花

大根の花をこ 一面方
ほとくはつら

鬘草

非 ぬらうを抜の下
ましく若をこれ 舊草



末黒之薄

袖中ぬに竹の
末黒とさう入

一花ふとここのまふのまふのまふと
とらへもつら

夫木

下ゆえのすくをたらふまふのまふ
やけのくすはまふらふらふら

草芳

萌あつまのあはば
香らうとといふかり

非 芳ーやいさの心の香解まて才磨

詩 芳艸之詞

文選 抜草

芳草生兮萋々 王孫遊兮不歸

詩 礎

情如芳草連天碧 穿蒼陌

如有情

身似楊花盡日狂

若草といふて

草若葉

若草といふて

正月の季まり 少し長ト
たるといふ△菊の若葉△鳶の
ワカ葉△萩れまろ葉

非 若なる葉少ぬのも大にを 其角

⑤ 酢漿草 酢漿草の根を煮てのよまゝ 由水

妙薬 艾をこくして腹に貼る 腹に貼る

若紫 紫草 紫草の根を煮てのよまゝ

⑤ 伊勢物語 伊勢物語のよまゝ

⑤ 狂 狂のよまゝ

接骨木花 接骨木の花を煮てのよまゝ

⑤ 疝氣藥 疝氣藥のよまゝ

銀杏花 銀杏の花を煮てのよまゝ

紅梅 紅梅のよまゝ

⑤ 麗枝梅 麗枝梅のよまゝ

紫梅 紫梅のよまゝ

⑤ 服梅 服梅のよまゝ

⑤ 新千載 新千載のよまゝ

⑤ 新後拾 新後拾のよまゝ

ふりかゝる梢の雪の影あけぬ
くれば井うすたぬわらうとれ

◎ 後拾遺 之浦
梅の花香へりて白くくもく
うきくくくくくくくくくくく

◎ 家集 道達院
梅の花紅くはる日紅くくく
か面の雪へ枝にをけき

◎ 類聚 紅梅遜 雅世
まらうきと新梅の梅のわら
角くは梅の影くくくくく

◎ 詞 春の廣。紅のち。くくくく
。林の木末に梅くく。由るく。く
く。く。く。く。く。く。く。く。く

◎ 狂 紅梅ハ巨燈の火をきくくく
く。梅の影へりてくくくくく

◎ 狂 羞もくくくくくくくく
く。く。く。く。く。く。く。く

◎ 紅梅詞 貞柳 韓駒
路入宮家百歩香隔簾初

◎ 識漢宮粧 三千ハタノヨキ
テガテミレバ紅ハイ

◎ 直疑夢到昭陽殿 一簇輕
殿ナリ紅ハイヲ見ハソノ殿

◎ 紅洗淡黄 昭陽ハ前漢成帝ト
イフ王ノ殿ノ井タル

◎ 春半花總発多應不奈
春ハナカバナシ花ハワカニ

◎ 寒 北人初味
識渾作杏花香 城コクノ人ハヤム

◎ 紅梅五字對句
照溪如濯錦 嫩蕊融紅雪

◎ 隔嶺似流霞 繁葩剪絳綃

◎ 繁葩剪絳綃

◎ 繁葩剪絳綃

詩 紅梅七字對句

詩楚

春水薄涼燕脂片

香不盡

寒日晴烘蜀錦机

酒初薰

壁上詩

蜀州郡閣二紅梅數株アリテ

サカニ開ク時一婦高キ髻ニ大ナル袖シテ高ラニ倚リテ

南枝向暖北枝寒一種春風有兩般憑仗高樓莫吹笛大家留取倚闌看

告紅梅ノ盛文 尺牘

庭前庭

蜀錦棄目 邀士

人妻云云三人お招き

足下典二三條

外像奉掛速致お借中

聖像 共暢觴詠之懐

持帚俟

尺牘 之啓上中下と記

満開 芳華。芳妍。綽約。明媚。馥郁。遊士。吟客。佳客。

逸人 足下典二三條 上公共同

遊中 君且負儵 暢觴詠之懐

上將駢吟筵 中催寬興之會 欲試賞遊

紅杏返春 梅下續詠之催趣 喜雀

如例の如く出内席ては
躍 豈不登臨

如例の如く出内席ては
文楸 附馳使

尺牘 上中下 公務と記と

催趣 促遊 展懐 邀宴

喜々雀躍 快衆心 想甚依然

上 称快万衆 中 何喜如之 豈不

登臨 上 步而捧誦 中 詣鏗金

芭 上 入廣夏受奇瑋 中 馳

驚而容吟慰 中 参扣宜唱愛

馳使 介子 僕士 上 貴奚

遽使 中 崇价 走力 銀鹿

狂 難波の梅をさすよどか

八重梅 花の八重なるは

排 八重梅や尾の
母の墓 菖蒲 座論梅

花浅紅より葉多く実の枝
ぞとて四五顆むらがりてを

ありあり人のたしむる座と
ありとふかたし人きり

越中梅 花大ふりて白く淡
紅と帯を後梅に似

黄梅 迎春花とつら梅に似て
梅の葉は高二三尺あり

正月に開く故に迎春花といふ
排 髪を染はるす者あり梅巻

初櫻 初花 花は二月

早く咲く梅の惣名あり初
花は三月をさす意もあり時

三月草木の部小くい
哥 万葉 人丸

位のほのほにぞう初花の
ましをつらと云はれあつた

哥 續後

伏見院

咲きしるか山の花の色を
る遠にのりくる花のさつき

哥 新古今

家内

わうらんらん志のべら花
たつたの心れみさくし花

待花

花のまといも守ても
はや花も咲ぬと母の恋

哥 家集

頼阿

とくさへて花の本の芽も春
花はまなきと山さくらと

哥 新拾遺

俊成

山花咲やらぬあはれと
わさこそそなるまは花の月

狂 花のまといも守ても
まう咲くとして花も

本の下に

系櫻 花とも

いひ無系といつうけ
こまひとくにさくかり

哥 あすも人さす花の枝
柳の糸よひすはをれらる 俊頼

俳 百すちも春のたの系花
系花をも梢よと花見は 京南

凡 吹い庭も掃らついと
狂 だもちの庭に咲ける系さく

ひさした海の上とて見るらん貞大

アそのやとちも花のやうまれど

今さひい

いさ梅の木端

姥櫻 花

密てまはる老女の華は

俳 花散といとれい花
狂 花はととこうい花

花うさくといこれまいお 左柳

児櫻 花

俳 花のまといも守ても

甘んごころり 鯨花

重櫻 花

哥 花のまといも守ても

たぐひとくさるさもさうらふ

① 徒て出づ一をせ 彼岸櫻

一を挿うと云 千丈 櫻の挿う路く咲くは十日

おし春分のごころは花挿の 那播かり 那名をべし 春分

② 熊谷櫻 の名を付 熊谷櫻 哉目

狂 春分をさきいしうりたてや志み

すらんあまふりたひん挿ハ貞六

種 植 草木の挿 さいき植

接 穂 異名 接頭。小篋子。

果ももれ枝とつぐこ二〇二

ちる若枝の肥整る陽に白ひ

たるととらほくべし 挿目ある

らに緩ゆるす皮と骨とらひち

がらぬ中へれすべし 春分と節

とするゆふにりかじ 葉よ

揚樹とはげば 植をさし 挿

に植とはげば 金植をさし 挿

小植をはげば 木植をさし 挿

③ 新撰六帖 光俊

④ 小刀のそれらりては 挿植連

⑤ 新ハ弦とははさな 挿木由水

挿植のそおのさや花整り 金雨

挿植におくのぞく 挿木が 塗

茄子栽 袂 ますし 植時 疏美

根におきて 泥とて 培ひかけ

みさをけりて 土をまき かくて

もろこし 一尺 西瓜 撒

肥地 二坑とす 二坑に 挿を

に づきまき 苗出 後根の下

土を 壅く 血のごとく 挿て

多く 根を以て すけり ぬえし

種蓮

ころねと葉のせむひて
ろろふないころねを

栽し挿

挿壓 木の下の土
油とよむ

分きり目と入きたられ土とよせ
其枝の上より本の方まかに土を

分るの方まかに土をうけず糞
あどぬく土の上とよむし次の

本木の方と切りて九月下旬に挿
し栽し五月梅雨の時分根と生

つらむのと知るべし 今月木犀
躑躅等とよせはぎにともいよ

壅培 根本の土とやうげ糞水
と合べし 石榴梨海棠

名によむし 充糞あり候ころし
旧糞より或ひは馬糞と用し

挿木 此法は黄土と日に下細
未しとゆと多分に節

よくまへへ六七寸はうり地に死
はきかためて枝を馬の耳れどく

にそぎのり 大ききこちる列の
木の枝を先穴とあけ其穴に

そぎたる枝を五寸こはさみぬく
水とそぐ陰地より或は上よ

おふひをこまへ一月と長かり枝
に至りて根と生したるぬかし

栽のべし 今月日本作らば
檜 栢 樅 丹 栢 羅 漢 松 海 紅 海

棠 山茶花 石榴 山 礬
薔薇 黄 梅 櫻 等 し 抹 藥 種

根 充存中かそぎよいくた
法草薬と採るる多く二

月八月と用のうりかららず
二月の叶の芽は八月の苗へ

たりとす放まらぬにせぬのこ
くそ葉はあわく宿根あつお

の別苗生え来ころころころころ
時取べし根たうていまいこふ表

修樹 菓樹の小枝枝切る
実といふと大ききなり

カ遂ニ帰ラスシテ死スツノ
傳母コレヲ悲ニテ女ノ常ニ

ヒキシ琴ヲ塚ニモチユキ
ケルトキタチニ千塚ソウチ

ヨリニツノ雉トヒ出ヅルヲ
見テ傳母イヨクカナシニテ

琴ヲ鼓テ雉ヲ操
飛操ト云樂ヲ作ル

捕 魯ノ恭王中牟ノ令トナル其
所ニスミケル童子アリ雉ソノ

傍ニアレドモ捕ヘスソノ故ヲ問
ハ雉雛ヲツレタレバコレヲ捕ルニシ

ノビスト答フ是恭王ノ政令ヲ邦
ナキニヨリテ虫境ヲ犯サス鳥

獸ヨク化シテナレシタガヒ童子
コノ仁心アリコレニ異ナリト云リ

燕△同巢 和名豆波久良女
異名乙鳥 ヨウチヤウ
ニヨルナリ

玄鳥 テヲカゲハ色ノ
ヨルナリ 鷲鳥 鷲ノ
鳴聲 ハトノ
鳴聲 ハトノ
鳴聲

於波 於波ノ
音 於波ノ音 於波ノ
音 於波ノ音 於波ノ
音

○春本ノ杖去る其花ハける
と甚捷し直に翻テ仰き

と人カ決ム深ニほろろ
と人カ決ム深ニほろろ

哥 建久元年百首 定家
を殺てなれんえのほろろめ

昭やたくて後もまともふ
哥 家集 頓阿

けまも古葉のぼてやまはの
やどととらとぬははらうらま

哥 千首 師兼
みだまのひまのひまをさうらて

まはらうらになくさくま
哥 毎日百首 為家

二月のすまうらとあけぬり
とやくとまをうらにらめや

詞からびすむのほめと名 異名ナリ
ある。なすねひて。朝ノ葉はむ

取ツキテ一ツノ鳥ニ至リケル
 人來テ王榭ヲ見テ是我王
 人ナリトテテ宮室ニイザ
 ナイムスメヲ以テ榭ニメアセ
 ケル然ルニ其人三十黒キ物ヲ
 着タリ榭ニメニ其故ヲ問
 テ是イカナル國ツ答テイハ
 ク鳥衣國ナリ其後榭家ニ
 歸リ梁ヲ見ルニ例ノゴトク
 ニツノ燕サヘツル榭コニオイテ
 カノ止ニル所燕子
 國ナルヲミレリ

石燕 陵
 山ニ石燕アリ雨フル時ハ飛テ
 イケルカゴトシ雨ヤム時ハ还テ
 石ト生ニ雨 詩經天命玄
 ナル 鳥而生商○高
 辛氏ノ妃郊禱ニイノリ
 テ燕ノ巢ヲヒロヒ食シテ
 契トイフ子ヲ生リ
 後ニ有商氏トナル

王京紅縷

宋ノ女姚王京
 家ニ燕巢ヲ

ツクル其子生育シテトモニ
 去ラントスルトキ王京ガ臂
 ニ集テ別レヲツク王京紅キ
 糸ヲ燕ノ足ニ付オキタレバ
 明年ニタ其糸ナカラニ來
 レリカクノゴトクスルコト六七
 年ニシテ王京死シタリ燕ハ
 カナシク鳴ワリ終ニ塚ニ至テ死

避戊巳日

サクホキヒラ
 日ハ泥ヲフク
 一ス廣義見ユ

負燕

元ノ元負三年
 湯佐ガ家ニ巢クノ或日

雄猫ニトラレケル雌燕其雛ヲ哺
 翼ナリテ歸ル其後毎年雌燕ヒ

トリクニ來リテ同巢ニアリケル
 一六年見ル人感号負燕ト云ケル

妙藥

淋病藥 燕とこそ
 ちるよして食ふべし

便毒ヒンドク

燕ツバメの殿ノミトハたハらハの

年トシ房トシ子コ等トかハにシとハ耐タまハ付ツじ

歸キ鴈ガン

陽鳥。使者シヤシヤハハのノアハいハぬルア

命ノチハハりア△ノ目メれ△ノ名ナ砂

ノ風フエ呂ロ 杖ツヅノノこノらノ樹ツキ木キのノ心

枝エをクくクてキまリけハ怪ケ海カイ取クに

とテ至シまハるル時トキ是ノこノらノこノら

其ノ本ノいハらハりマるル一ノ片ノのノ指サシ本ノと

其ノ本ノとハいハらハいハらハ月ツキ呂ロを焚て

故ノ事ノ新ニしテ杖ノの形よシ出スと

古今

躬恒

ままらまらま△ノ之ノならりまらり雪ユキの

及ツゆきこららにとやほてまり

後拾遺

國基

ららすすこらにかくまづことアらるか

ままのまたハ八ヤ等トの考もハ取ルるよ

たのむのアのいえきまらん

家集

定家

詞ノ言ハ後ハかれにゆの語をれいしとまひ

たとにいのる所ノ了スるノゆりの末

連ノあをまきるがの送る柳也宗牧

月ノくる月ノふから琴対奏る也紹巴

月ノもまておははとこノ風の月宇養

相ノ石ノの多おらうと何百里蓮二

明ノ乳トおまりまらしるるも嵐雪

表ノ冷ノ一トとおと列まらる也野水

狂ノ常ノからるら下ひもらるらゆけ方の

こノのあらうへらりかりがの負柳

弦ノよ似とといれどするも味の

去ろきハのらとと先へらるうや紫笛

詩 歸ノ之詞

洞庭春水緑 衡陽旅雁飛

洞庭湖ノ水カ春ノ色ヲナス

時ブニニハアカ旅ダチテ衡陽

ト云処ヲサチタカクニタケルリヨモニムカフ

カヘルリ 差池高復下欲向龍

門歸 差池トツラナリテ高ノトヒ

ヒキクニテ 龍ノト云アリニカツ

テトヒユクツ

鶴の リニホロウクワク 林浦籠鶴 林浦孤山隱

ニツノ鶴ヲヤシナフ 縦セハ飛出テ 雲ニ入テタノシク久シウニテ又

籠ノ中ニカヘル 林浦小舟ヲウ カメテ西湖ノ寺々ニアソフコト

常ナリ 若其畱守中ニ客ノ 来ルコトアレハ林浦カ童子籠

ヲヒラキ 鶴ヲハナツカナラズ 林浦カアソフ所ニ来ル 林浦コ

レヲ見テ ヤウニウニホル 小説ニ 家ニカヘル 日人三人

アツニリ 各其オモフコトコロヲ イフ人ノイヘルニハ揚嘉ノ

刺史トナラン人ノイヘルハ 室多ホニキ一人ノイヘルハ鶴

ニフリテ天ニホラニトイフ 其カタハラ二人アリテイハク

我ハ腰ニ十万貫ヲ纏アテ鶴 ニノリテ揚州ニ上ラン

化鶴 ケケツルト 神異録曰玄宗沙 苑ニ獵ス鶴ヲ見

テコレヲ射ル鶴矢ニ中テ西 南ニク時ニ益州ニ道觀ア

リ道士トモニ歳ノ間ニハ三 四度来テ遊ベリアル時徐

佐郷トイヘルモノ外ヨリ来 テ氣子ニ謂テ曰我山中ニ行

テ矢ニアタレリトテ則其矢 ヲ壁ニカケテ後日此矢ノ至

来ラバカヘスベシト云テ帰ル ハタシテ後日明皇蜀ニ幸

ニテカノ道觀ニアソビ其矢 ヲ見テコレ我沙苑ニ鶴ヲ射

時ノ矢ナリトテ此時徐佐ケ イガ鶴ニ化ニタルヲ知レリ

客来吊 カクキカリトシラフ 陶侃傳曰侃 母ノ憂ニアタルニ

ヲヨニテ墓ノ下ニ在リ勿心ナ 二人ノ客アリテ来吊フ哭セズ

テ退ク促コレ非常ノ人タルヲ
ニル隨テコレヲ視ニ雙鶴ト成
テ去ル○右詩故事共引鶴
ニカキテス鶴ノコトヲ記ルス

鳥之巢 △古巢 ハ柵ト

云々鳥ハ宿ト云独鳥ハ止
ト云衆鳥ハ集ルト云五雜

廻いづく名ノ巢ト云ハ
其巧ト人ト云たゞ只一口兩乳ト

以テ結末ニ其堅固なる事ナ
ホ本と扱テ巢ハ終ニ傾ト云

哥 うの不動

かひのうらにきのふへへはるの
子のうらにふまなうひらうら

○雀ハ巢ハにて真核ヲ蓮ニ

孕雀 ハラミナウ 雀子 スチウ スチウ スチウ

巢ニひてふみと依テ其卵ニたあり
其子の口ニふまなうは雀ト云

哥 新撰六帖

知家

人はうら花のひまのひなれつ
まばしとふまなうは雀ト云

○ 源氏系はふ

しうされのうらの卵ひるすま
のまといぬきうら雀はふらと

りるこありこのふをあり
雀子といふ卵のまよと云雀

○ 雀ハハのひまきうかひと云
たちありしやうしことうらん

○ 雀一足ハふみすまぬぬ由ニハ瓦
雀のやあかりほまにハの陰其角

妙藥 病癒の薬 生る花の

投土ニ入息をとりぬや
こいあそそあつ用也

なん産の薬 すまの巢と云や

きし 雀自正綱と云葛根
十葉ト云内の卵子のハと
あつれかききて用也

獸茶 崔世羽 氷砂糖 一斤 酒一

升炭火にてせんかきて春の松の葉を

松葉鳥 着いたくきこへぬたる

春の松の葉を食す

歌 夫木 寂蓮

深山木の雪ふる葉よりうれ春て

新雉とつとく松むいやくとく

非 松むいなる多もちとせう天女貞室

孕鹿 九の月より一子を

生とつう〇万葉六鹿

の子のひとりと松河のりり

非 花つまの爛の後に鹿白羽

鹿角落 角解といひ小の鹿生て

三年にこ其角自落

非 豆ののららち麻の角 潘山

為すまの後の鹿角 麻の角 来山

妙薬 産後目まの葉 麻の角と

はさかさの葉 麻の角 美松出樹子

と葉ふに松とひねりかけては

妙術 麻の角とあつるかよすこへ

筋骨を加えて煮て酒すじ

蜂 蜂巢 蜜の多巢の内

たらて冬令へ

のまより出て花の葉とて蜜に

醗して於て。蜜の蜂とては

歌 定家

らきて世とらる色の朝に蜂の

とすうよなれぬいと入あつ

非 効学院 蜂はあやまる年貨 蜂

蜂の巢や下たかづもさうと 瓢 瓢三

素蓋鳥のさくれん 蜂の羽が 支考

狂 狂つらう 蜂の羽と 蜂の羽と

たくさすもふふりいと入 加木

詩 蜂之詞

蜜蜂不食人間倉玉露為

酒花為糧 蜜ハ人間ノ米ハク

ハス露ヲトツテサ

ケトニ花 作蜜不忙採花忙

ヲ食トス

蜜成猶帶百花香 蜜トスルニハギスニ花ヲトルハイソカレ

サテ蜜トナリケレモ百花ノニホヒカアルリ

故 蜜糧 葛仙翁客上對食ス客寄

戯ヲ見ユ云葛仙曰リ飯ヲ

吐クミナ蜂トナリ冬ニク ハチカセノオトツ

ニテ又三納六飯トナリ **蜂飼大臣**

十訓抄京極大政大臣宗輔ハ山

蜂ヲ何丸ト名ツケ飼玉ヲ故カク

号 **空甲蜂** 神瓊禪師蜂窓紙ニ

アタリテ出ントヒテ出ルコトアタ

ハサルヲ見テ世界カクノコトクヒ

ロニトイハトモ出ルヲアタハスト云

妙藥

治コレラニ美 治の薬と

女作の薬と云一東に云う三本一

あり三升入て二升に用 乳の歩茶

心格の巢と云はは **妙術** 治コレラニ美

たるに地は竹と丙丁火と三言と云

口の中よてもイナイ火と念ずると七

日して其土と云 人さす可患 能 古 虫

どうぬるべし **虫** 死てこふもまを死教

狂白うひつかなんぞと同 ハチ蜂の

あんと云ふいふいしせぬ ハチ金

蝶 甲蝶。黄蝶。鳳車。野蛾

採花使。粉柏。蚊蝶

右は名いことごとく 品類の類

と云ふいひの化したるものされど

まハ其心しのみ食すものたうれし

哥 古今 おのゑをた 遍昭

ちうぬまは後いあをなつる花を

かひひま すもすも人懐くる

夫木 定家

乃のまあるらなればねは 自まら

新舊の梅の花の ころもてハ

ころれもまぬく 庵茶にたはけ

そまれの妹と云 以懐くる 正 仲

詞 さひらふ。ちうかふ。まとも。初

懐。花ぬる。花くはらう。初

て人のなれて。て人のいろく

てへのころ。おねうらうし
。香とぬをむ。嘘をやぶる

連ころまのれよけたてのこ蝶宗

俳名舟中たをへて蝶々其角

俳今よりまの暇ぬ小蝶々曾良

俳種達をまの蝶のたひ山里

俳芝行有の裾さる蝶々川治川

狂蝶々の神さへをひなれち

人もかぬくつてまの蝶 貞柳

詩 胡蝶之詞 東坡

双眉捲鉄絲 兩翅暈金碧

ニツノ眉ニハ黒キ糸ヲニキタルヤウナ亦

フタツノツハサハいろくノ色ノメクリア

ルナ 初来花争妍 忽去鬼

無跡 初テキタルトキハ花モソノ色

ハ夢ノアトモノコサズカホ

ヨキコトハイタラトナルガ

○香鬢粉翅 暖争飛 品物

多情 總属 伊 トレリアタカナ

空ニトビカハス春ノケニキハ何モカモ

ミナコノ蝶ニケニキヲウハソレタリ

上國万家風月夕 樓臺取

次宿花枝 都ナトノ家多キト

トナレハワカヲモフニニヨロシ

キカタノハナノエダナトニヤトル

詩 蝶五字對句 同上

徘徊穿樹影 乱隨狂絮舞

繚繞戀花衢 輕伴落花飛

詩 蝶七字對句 詩楚

翅殘懶舞投幽檻 莊叟夢

力困慵飛過短牆 謝公名

蝶 嶺南異物志ニ入

蟹 海南ニ浮ニテ蟻

蝶ヲニル大サ蒲枕ニ肉ヲカケル

介ヲ至リ是ヲ散ハキメテ肥美

唐中宗

唐穆宗ノトキ
禁中ニ花園キ

ケハアル夜蛺蝶數万飛来テ
花園ニアツミル宮中羅巾ヲ
以テ撲トモ得ラズ帝細ク
中ニバリテ數百ヲエタリ夜
アケテコレヲ見レハ庫中ノ
キニギヨクセニナリ

愛花人

長明心集ニイ
ハクムカニ佐國

ト云モノ花ヲ愛シテ六十
年遂ニ飽カスイハク我生レ
カハルトモ花ヲ愛スルモノニ
ナラントノ詩ヲツクリテ死タリ
其後アル人ノユメニ蝶トナリテ
侍ルト見タルヨシカタリケレバ
其子花ヲ心ノヨフホドウエ
テ其ウエニ蜜ヲ朝毎ニソハ
ギテ孝養ノ心ニソナヘタリト
ソ孝心ノイタリカニスベキト

莊周夢

蝶タルヤカナラズ
分チカタクアラニ

云く是ヲ物化ト云莊周夢ニ胡
蝶トナルサメテ周セトモ蝶ノ
周タルヤ周ノ蝶タルヤ不知

蛙（異名）石蟬 丁子蟬

△蛙子一名科科 蟬の子秋かけてある

夫木 家房

千五百番 家長

新六帖 信實

兼盛

家集

家集

家集

はあは蛙の多し老より

あそくやうたんまは小山田

詞すだく。法多。川池の沢田。

小田の蛙。あはあ。苗代あ。夕月

あ。心吹の夜の夢。ゆきまきこし。

蛙とまのそらうらひ。若乃。うんま

かまはるく。よはひいき。こま。

かまはるく。あとなはさく。あせり

我おと蛙鳴らん西り回 蓮二

蓮王も雨にたれて陸も 草也

角りこ蛙鳴 江の甲は蛙 其角

狂 序のりを今まひてやよ蛙

よひひふうさう如まきみ以貞柳

蛙 龍王海ノ辺ニ

蟹 女子雑説 蛙ニアフテ問

テ云 汝カ 喜 怒 何 如 曰 我 喜 怒

時ハ 清風明月一部ノ 鼓吹怒時

ハコレヲサキニスルニ努眼ヲモツ

テシコレニ次クニ臆 肢ヲモツ

テシ脹リスギルニイタリ

テノキヤムナリ

毛弥

日本紀應神紀冬 十月国栖人国津物

ヲ献ス此クス人常ニ山ノ菓ヲ

食ヒ亦蝦蟆ヲ煮テ上味ト

ス名ケテ毛弥ト云○本朝

食鑑ニイハク山東人蛙ヲ捕テ

熱キ湯ニ没シ皮ヲ剥キテカ

ラシ醋ヲ和テコレヲ食フ唐王晏

群蛙ノ鳴ヲキ、テイハク此殊

人ノ耳ヲ聒スクス珪曰我鼓

吹ヲ听クニホトニドコニ及

バズトイヒケレハ晏慙テ退ク

晏ハ鼓吹ヲコム人ニ○宋書ニ

蝦蟆ノ膾見ヘタリ○漢東方

朔カ傳ニモカハスヲ食フコト

見ヘタリ○淮南子ニ五月十五

日蝦蟆 蟻ヲ作ルトアリ○花

史左編ニ百越ノ人好テ蝦蟆

ヲクフフ 筵會アレハコレヲ

最シヤウ美味トスルナリ

井堤蛙

袋草子日帯カ
葺信始テ能因ニ

逢ニ時能因今日見泰ノ引
出物ニ見スキ物アリトテ懐

中ヨリ錦ノ小袋取出是我
重宝長柄橋造時鈍屑ニ

ト云テケレバ節信大ヒニヨロ
コビ又懐中ヨリ紙ニツメルモ

ノヲトリ出シテ見セケル能
因トリテ見ルニカレタル蛙ナ

リトテ共ニ感歎ニ又
フトコロニシテ帰リケル云

妙術

止蛙鳴 藪の末紀
妙術 杖の多ふと芝焼はて

池ノ 鮎子取 東国宝澄に青魚カ
トコ 勢みハカトノコ

蒸鮎 着扶杖前より出づは魚
大さア半塩多と意運干て

法ガ 出ろ火アアあつて合入
排ヒカを平放すはまぬれ衣其角

狂カ ぎとつへはとろろこの塩おハ
いふいれぬ味て了とあれ 道鐘

田螺 田贏一名 田青の胡麻と
からしとこむむらり

排引る 井中にさるや回はる蓮ニ
赤眼江 湯法 田螺とハ

妙薬

赤眼江 湯法 田螺とハ
あつ粉と白粉を加へて

更齋 湯法 田はの白を平と
よくとろろ松のみどりと塩が

はたろと松と一とをこくく
松脂と田ののせふなど加

らす 越えをろろあわくめ付へ
蜷 (異名) 河貝子 蝸蠃 螺 螺

總角の 括ひたるからいのごと
ぬに肥ち 流法の倍ハアゼキ

排 ちうまへの 茶の葉ういこれ法三
産後 後 痛と治す

妙薬

産後 後 痛と治す
はて付へしあふの痛と治す

い不唐菜

まのぼと二三を併

とて後境のまをさす

寄居虫

形蟹に似て境の売よ
やらのあじやこが貝

一名寄生 蝦三三朝鱒からん
たのおよ一二尺のものあり

非寄生 蝦のまをさすことほは日提亭
かたし長のまをさす寄居虫は由

狂 弓くは境の上から後世と
寄居るうのかひいさる 信海

馬刀

養の如くなる馬の
の形あり

非 弓くは力三三は帆波蓮二
ゆはめてまをさす力の真も多 千丈

狂 弓くはまをさすことほは日提亭
ゆはめてまをさす力の真も多 千丈

舌筋末

三才舎曰く文字不詳
黄鯛魚に似たり

非 舌筋末をさすことほは日提亭
沈良のまをさすことほは日提亭

必用

ひるは二月一ヶ月必用
又長生の法号とす

破軍方向

夜九ツ	巳の方	夜八ツ	午の方	夜七ツ	未の方
申の方	辰の方	巳の方	午の方	未の方	申の方
酉の方	戌の方	亥の方	子の方	丑の方	寅の方
卯の方	辰の方	巳の方	午の方	未の方	申の方

日刻

まのぼと三日の日刻の刻み
の目やの刻と辨べし

出行作事

西南より
てゆくべし

壬の日をのぞくべし 甲庚
丙壬のしをさすべし

樂事

是月とあはれ
ひて民俗のたつ

拾ひまねと踏む
るひより松の二月末より大坂

さき 窓系 梅山 さらさらのそり
なり 酔に 乗と 暮と 惜そら
おる は たの 一死 ため だに
たし まは けり 日月 人んを
とし 偏なき 樂事
中 松の とき かりり ちる

天氣占候 是月卯の日
三あれの 昼よ

素問曰 丑に風 けり すれば
人寒熱 多し さらり 甲子に

雷あき 大熱 さらり 雨あき
早 さらり 月ひり さらり 災 災あ

乙未 東に 入る とき 秋米 價さる
西に 入る とき 蠶 米の 價さる

あつ け月 寒 ぬれ 早 さらり 月
融け さらり 茶 女 氏に 災あり

二月用 左り
あるす

養猫法 養生とよ 猫捕
ぬめ 拾と ぬめ 拾と ぬめ 拾と

花壇土 け月 花壇 土と ませ じ

製筆 け月 三月 古ま じに ぬり
制 表ら へり 筆と 佳と す 毛ハ 秋ハ

九月 以に 取ら ぬ 赤毛 白毛 じに
はと 子 軸竹 とも 同く 其は 切と じ

利也 竹と 煎と 利も 六と じに 入る
毎く 酒に 硫黄 と 入して 筆の

毛 じに 舒と 筆の 扱と じ
果多生 梨石 榴 木 等の 枝と

ふとも 其外 枝相 良の せと じ
の さら さら け 枝の 下へ たり

雑品 葡萄の 扱と 扱幹を
あけ おく べー 〇 墙垣 或 築く

べー 〇 石 桑の 樹の 下と 春く
をー その けり こと じに 草

木の 茂ら さらり じに 社 目 あり
の 酒と 扱と さらり べー 扱と じ

ふとも 生と さらり こと じに 草
初年 さらり の 酒と かけて じ

養生

二月 天気が晴れる日と
 多く三里路を歩か
 とく一陽をたたくけ
 ふせぐ茶に交にゆる
 衝心のやまひま一と
 叢書に及ぼるり但
 人の病に依りてさ
 匠の右の二穴にか
 服神明散
 佩べ 蒼朮 桔梗 附子 烏
 頭 罌粟 炮炙 細辛 高
 散と紅絹の袋に入一
 脊に帯も六一水は
 時夜あふけらとり
 假たてのあつて服
 あせ出てやまひ子
 子さまらるる法は
 花と枕を陰干して
 戌子の日假しての
 後とく一日に三

二月飲食 料理献立

禁 兔肉 鶏卵
 忌 非を中ぶる 鶏卵
 公を 黄花菜 痲
 やぶる 痲 痲

陳姐 痲を中ぶる
 痲 痲を中ぶる

陰流水 痲を中ぶる
 痲 痲を中ぶる

酸物 痲を中ぶる
 痲 痲を中ぶる

大辛物 痲を中ぶる
 痲 痲を中ぶる

料理 汁
 申 申

餅いし 餅いし
 つらし 餅いし
 白うさ 餅いし
 拾りさ 餅いし

鱠 まます こい。かいろうま
ゆきり。むら
りり。さけ

白うと。ほくし
ま。ま。ま。ま
ま。ま。ま。ま

指 さし けり。けり
ま。ま。ま。ま

二汁 にじゅう 塩かし
お。お。お。お

燻 くわん 白うと
ま。ま。ま。ま

和物 わぶつ たこ
ま。ま。ま。ま

精進汁 しやうじんじゅう 根いも
ゆりね

鱈 たら あげふ
ま。ま。ま。ま

旨味 あじ しょう
ま。ま。ま。ま

二汁 にじゅう ま。ま
ま。ま。ま。ま

煮物 にぶつ 推茸
ら。ら。ら。ら

和物 わぶつ かん
ま。ま。ま。ま

時魚 ときうい かし
ま。ま。ま。ま

鳥 とり かも
ま。ま。ま。ま

青物 あおもの 露のた
ま。ま。ま。ま

梅 うめ 極上の梅
ま。ま。ま。ま

酒 さけ 入ま
ま。ま。ま。ま

花 はな 紅白
ま。ま。ま。ま

貯 たくわ 貯
ま。ま。ま。ま

法 ほう 法
ま。ま。ま。ま

に搗破いたの上まで上るまで
絞く入るに搗同の入りは換に練蓋
とて人の通ハさるふまを煮るに
用ゆる時あはれとそくたてて
煮く合れば花用て煮の時に達
うそのはに終のけんまにしまし

蕁菜海松煎法 煮つとゆと
あ一升塩一合あわせ俵蓋を
色かりしごとくそくたたりし

海温煎法 煮つとゆと
あ一升塩一合あわせ俵蓋を
色かりしごとくそくたたりし

煎る時あはれとそくたたりし
換せし

本芽作法 毎月晦日に
煮つとゆと

煮つとゆと

煮つとゆと

煮つとゆと
二月終



庫文閣内			
函	一	三	和
架	冊	號	書
			類